

2015 年 5 月 15 日
第 218 号 (隔月刊)

題字 住谷悦治



燎 原 社

(京都の民主運動史を語る会)
代表 井口和起
事務局
京都市左京区高野東開町 1-23
第三住宅 33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823



真下飛泉 (瀧吉) 肖像 (『京都教育大学附属京都小学校百周年記念誌』から)

知恩院三門の前の道を北へ150メートル。良正院の門前に建つ歌碑。飛泉の郷里・福知山市大江町にも歌碑や顕彰碑などが建っている。

たが、当時の住職は、この歌碑の前に立ちだかつて歌の真意を説明、「この碑を倒すなら、先ず私を倒せ」と言い、ついに米兵は立ち去ったという。

真下飛泉「戦友」の歌碑
(東山区知恩院塔頭良正院)

禁止された厭戦調「軍歌」

〔連載〕

京都の民主運動史 史跡散歩⑩

「ここはお国を何百里／離れてとほき満洲の／赤い夕日にてらされて／友は野末の石の下
どこか哀調を帯びたメロディは戦後も広く歌われてきた。「戦友」は、京都師範附属小学校教師であった真下飛泉(明星派詩人)が学芸会の児童劇のために作詞し、中学校教師の三善和気(のち宝塚少女歌劇団作曲家)に作曲を依頼して1905(明治38)年に発表された。
「戦友」はたちまち大反響、楽譜を求める人が多く、ついに出版され、演歌師によって全国に広がった。
明治・大正・昭和と歌い継がれてきた「戦

友」は、太平洋戦争末期には歌うことを禁止された。それは、4番の「軍律きびしい中なれど／これが見すて置かれうか」が軍規違反とされた。14番まである歌詞全体を貫く厭戦調の軍歌を軍は歌わせたくなかったであろう。
飛泉は、平民社発行の国禁の書を密に読む青年であり、「君死にたまふこと勿れ」を発表した与謝野晶子とも親しかった。
1926年、真下が48歳で亡くなると、教え子ら1824人の賛同により、翌年11月、住居近くの良正院門前に歌碑が建てられた。敗戦後は軍国調の歌詞であることを理由に占領軍からこの碑の破壊を命じられ

2月例会 今に生きる草野昌彦と仲間たちの活動 兵庫からせまる
発掘 戦後70年 京都で最初に「憲法展」を開いた住谷悦治さんに聞く(1977年)
憲法施行の日に誕生した「平和おどり」を執念で復活
《この1枚》府庁の憲法垂れ幕が降ろされた瞬間
「燎原」連載「革也と丹波」記載の前田英吉と棧敷新松 その3
《悼》鈴木良さんを偲ぶ
《BOOK》宮城泰年著『動じない心』
《随想》生地 大連のこと
会員消息 15 情報スクラップ 15 編集後記 16

田中 隆夫 2
孝岡 楚田 7
田中 隆夫 8
奥山 峰夫 12
黒住 嘉輝 14

京都の民主運動史を語る会・
結成35周年
2015年度総会と
懇親会のお知らせ
16

今に生きる草野昌彦と仲間たちの活動

兵庫からせまる

田中隆夫
兵庫県国庫
調査幹事



執筆者紹介

田中 隆夫（たなか・たかお） 兵庫県治安維持法国賠要求同盟幹事。西宮市在住。孝岡 楚田（たかおか・そでん） 元「赤旗」社会部記者。香川県高松市在住。

奥山 峰夫（おくやま・みねお） 元・大阪経済法科大学教授。部落問題研究所理事。下京区在住。

黒住 嘉輝（くろずみ・よしてる） 短歌「塔」選者。本会世話人。元・京都府立高教組委員長。西京区在住。

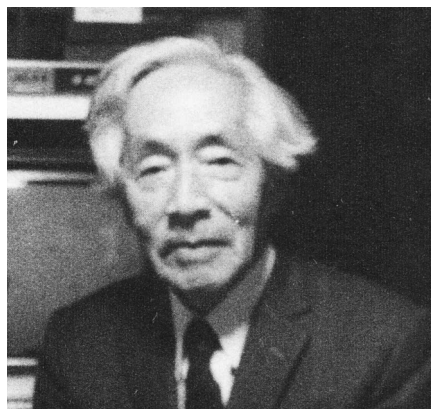
2月28日に行われた例会については前号で簡単に報じましたが、田中隆夫氏の報告要旨を事務局メモに従って報告します。

当日の報告のサブタイトルが唯物論研究会・「京都人民戦線事件」の草野への関西学院及び旧制甲南高校永井智雄からのアプローチ。報告者の田中隆夫さんは、既に関西学院における戦前の学生運動について、一昨年の『兵庫民報』（11月24日・12月8日）において「治安維持法の犠牲となった関西学院生―西村欣治郎」を連載され、旧制甲南高校でのそれについても、昨春秋以降「治安維持法と現代の課題」として研究報告をおこなわれていて、今回はこの成果に依拠しながら、京都での人民戦線事件、その中の『学生評論』の編集責任者であった草野昌彦との関わりを報告頂いた（参加者18名）。当日の報告は次の通りである。

西村欣治郎と関学の運動からのアプローチ

草野昌彦は、1928年関西学院文学部哲学科に入学した（以下は19を省略した西暦を用いる）。戦前の関学でも、詩・演劇など文化活動が大きく広がった高揚の時代であった。入学前後の関学では、文学部の学生を中心に、学外の岡本唐貴・浅野孟府・草野心平・原理充男などの画家や詩人たちと交流し、小林多喜二、中野重治などプロレタリア文学の作家たちも学内誌に登場している。28年3・15の弾圧後にナツプ（全日本無産者芸術連盟）、機関誌『戦旗』が誕生。戦後の黒沢作品の脚本家としても著名な久坂栄二郎（黒澤明監督「我が青春に悔いはなし」）「天

国と地獄」脚本）が関西へ派遣され、守口の西村欣治郎叔母の下宿屋を拠点に、西村や大岡欣二などによってナツプ関西委員会が組織、西村は文化人や文化運動の組織化の先頭に立っていた。宝塚歌劇団主任指揮者須藤五郎も創刊以来の『戦旗』読者、西村を講師に、指揮者や労働者たちで科学的社会主義の学習会をおこない、党への多額の寄付を西村



草野昌彦 略歴

- 1908年 東京で生まれる。父佐野善作は東京高等商業学校（現一橋大学の前身）教授。
- 21年 大阪府立高津中学校入学。
- 26年 関西学院入学、2年先輩の西村欣治郎を知る。
- 32年 市川幾子と結婚。4月法政大学哲学科入学。
- 35年卒業、京都市左京区永観堂町に転居。
- 37年11月「京都人民戦線事件」（『学生評論』の編集名義人として治安維持法違反で検挙され収監）。39年11月出所し自宅へ。
- 42年 応召、大阪市中部第23部隊に入隊。
- 47年 京都市教員に採用され柏原、桃山、滋野、西院、下鴨、梅逕、加茂川、二条の各中学校を歴任、75年退職。
- 60年 日本共産党入党。
- 75年「京都民報」に「かくれた京名所」連載執筆（2年間）
- 77年「学生評論」復刻版刊行。
- 90年12月5日 永眠。82歳。

に渡している。教師や徴兵経験を持った西村は27歳で、学生内でも慕われ、日本共産党関学支部の活動の軸に座り、哲学科では草野の2年上であった。叔母の経営する下宿でもあった守口の家には、京大哲学科を卒業した梯明秀が住んでおり、同じ哲学科を卒業した戸坂潤を西村に紹介し、三人の思想的交流も始まっていた。哲学会会長となった西村は、その年の哲学会主催講演会に、当時神戸商業講師でもあった戸坂を招いた。これに参加した草野は大きな感銘を受け、これが理由で卒業後、戸坂の後を追いつ法政大学へ進むことになる。西村は地下活動に入り、卒業直前に

除籍、30年7月16日に東京市外で逮捕され大阪に移送、拷問により獄死した。草野が戸坂を慕い法政大学に入学したのは32年、唯物論研究会が発足した年だった。戸坂から草野は西村への強い思いを聞いていた。草野は、西村欣治郎について、「回想の戸坂潤」のなかで、戸坂紹介以上のスペースを割き西村欣治郎を語っている。「学問的関心も深く、私たちは彼とよく哲学や自然科学の話をした。しかし、一番大切なこと

は彼のゆるぎない決意であった。科学的社会主義の正しさを信じ、身を挺して党のためにつくすという気概が、彼を知る誰にでも感じ取られた。この点が、敵味方の区別なく人を惹きつけた

甲南高校と永井智雄からのアプローチ

19年創立の甲南中学を母体に23年、7年制の高校として、関西財閥の師弟が入学する甲南高校が誕生した。

京大滝川事件では、出身高校別の結集がはかられ、高代会議が運動の軸になった。甲南高校出身者の加古祐二郎は、法学部講師として事件当事者であったため、高代会議ともつながり、

のである。私は非法法時代、彼ほど立派な共産党員を見たことがない」と紹介している。草野は、戸坂の下で哲学を学び、唯物論研究会で戸坂を支えていった。

同窓会・甲南高校生は直接の支援に立った。なかでも、法哲学専攻の加古が甲南高校の講師に来ていたこともあり、加古を講師に永井智雄などが資本論の学習会をおこなっていた。共産青年同盟の班も生まれ学習や反戦を訴えた機関紙などを発行、永井たちは京都に向き、加古を右翼の手から守るな



ど防衛活動にもあたった。事件後、加古は講師として立命に移る。

甲南高校では、34年2月、山岳部を中心におこなわれていた社会主義研究会が治安維持法違反として弾圧される事件が起こった(旧制甲南高校事件(白亜城事件))。この事件で検挙された学生のなかには、戦後民主主義科学者協会などでも活躍する物理化学の関集三(阪大) 原子物理学専攻で、戦後最初に日本共産党大阪支部を結成した山口市太郎(阪大・東大)等もいた。広田内閣で文部大臣を務めることになった平生甲南学園理事長は、検挙された

『学生評論』の編集と弾圧

草野昌彦が法政大学を卒業し左京区に住居を構えるのが35年、そして『学生評論』編集名義人となり、特高に検挙されるのが37年11月、『学生評論』への弾圧は、昌彦拘留中も続き、38年6月には、藤谷俊雄・関原利夫・永島孝雄らの検挙となった。

『学生評論』が、15年戦争の直前に、平和と京都の人々の良心の灯として、公然とそれも伏字なしで出版された意義は大きい。ここには昌彦たちの苦勞が光り輝いている。同時に、検閲を受けた『学生評論』が、コミンテルンの統一戦線作戦の一環として出版されたという特高警察のどっち上げで、出版停止、発行人・編集者・投稿者が検挙され、拷問を受け、昌彦に至っては2

学生に転向を求めず復学させる措置をとる。

逃走中の永井(共産青年同盟神戸市委員長)も卒業を目前にして逮捕、一年半の未決囚となる。

永井は出所後、同志社に入学、ここで初めての演劇活動を開始したが、それが永島孝雄、布施杜生たちと加わった「エラン・ベタール劇場」であった。出所後、公然とした政治活動ができないう永井は、演劇活動をとにする永島、布施を助け、『学生評論』に加古を紹介し、永井は草野昌彦たちとともに援助にあたった。

年間の理不尽な拘置生活を強制されたこと、この二つのことは、京都の平和と民主主義の証としていつまでも語り継がれるだろう。

しかし、弾圧の事実については、弾圧側からは誰一人も謝罪も賠償もせず、かつ、弾圧した側が社会的地位を復活し、苦難の歴史から日本人民の努力の結晶として生まれた日本国憲法を改悪しようとして、今具体的に一気に進めている。戦後70年の今こそ、草野たちや学生たちのことを思い起こし、彼らを「生き返らせる」時が来た。

【付記】

15面の会員消息に、例会後に頂いた昌彦氏長女藤本杏子さんからの便り掲載しておく。

発掘 戦後70年

1947年5月

新憲法施行

京都で最初に「憲法展」を開いた 住谷悦治さんに聞く

「府民とともにあゆむ憲法30年」（1977年刊）から

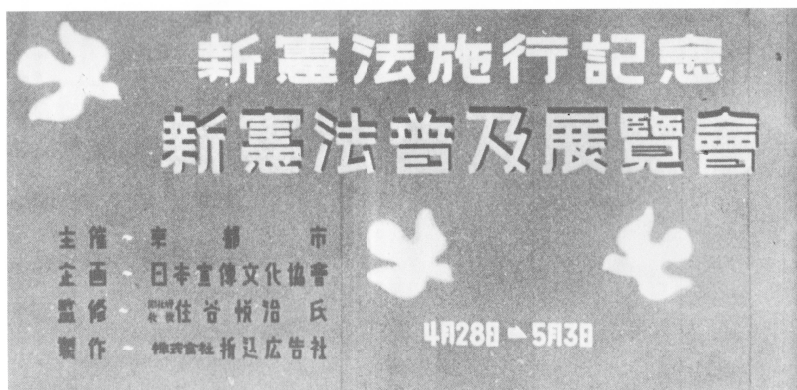
蜷川民主府政の憲法行政はいまなお光り輝いているが、1977年11月に「憲法五団体」が刊行したパンフ『府民とともにあゆむ憲法30年』には、護憲連合京都地方本部、京都憲法会議、憲法を守る婦人の会、京都総評、京都・府市民団体協議会の活動紹介とともに、京都における憲法普及運動の「原点」として、1947年4月28日から5月3日まで京都市岡崎公会堂（のち京都美術館別館）で開かれた「新憲法普及展覧会」が写真と、住谷悦治氏（元同志社総長）へのインタビューで紹介されている。以下、資料として要旨を掲載する。

——先生は京都における憲法普及運動の草分けとして活躍され、今日まで日本の平和と民主主義の実現に努めてこられました。30年前の状況についてお話しいただきたい。

住谷 戦後、精神的にも虚脱状態であり、物質的・経済的にも極度の貧困で混乱を極めていたさなかに、この憲法は戦後の日本が進むべき方向を示して誕生しました。そして官民一体となって物資不自由の中で、心のこもった大祝賀式典を挙げるとともに、この憲法

の宣伝普及につとめたのです。京都でも円山公園に政府の書記官長が来て講演を行ったのです。

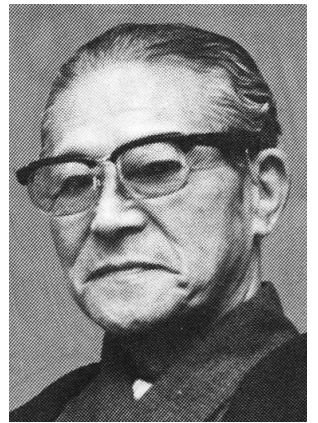
私は当時、京都新聞の論説部長をしていましたので、憲法やデモクラシーを大衆の中に生かさねばと考え、毎週この問題について論説を書きました。しかし、ジャーナリストの感覚からみまると言論では限界を感じ、何か目で見えるもので大衆に訴える方法はないかと考えた結果、京都市文化課の協力のもとに1947年新憲法施行記念日に



“ 原点 ”

——京都における憲法普及運動

われはまだまだ敗戦の余燼にまみれてはゐるが祖國再建の熱情に燃えてゐる
いま新生日本の輝やく平和の新憲法が公布されたわれは心からこの「日本國憲法」の生誕を祝福しその精神と内容に就て充分に識りそして完全にこれを身につけて祖國再建への聖典としよう



住谷悦治 (1977 年)

岡崎公会堂において「新憲法普及展覧会」を行いました。

ここでは、民主主義の歴史、新憲法成立までの経過について述べ、重要な部分をピックアップして、これらに新旧の事例を対比し判りやすい解説をくわえたうえ標語と絵を配して数十枚のパネルを作成し展示しました。

この憲法の絵の展覧会は名もない広告屋さんの協力もあって予期した以上の成功をおさめたのです。

——最近、憲法の空洞化、なし崩し改悪などといわれているように、日々の暮らしの上にはまだ憲法上の問題が山積していますが、これからの憲法運動のめざす方向についてお話しくさいます。

住谷 戦後32年を経て、戦争を知らない世代が国民の過半数に達し、今後も次々と育っていくわけで、これらの人々に憲法を正しく教え込んでいくためには、何と言っても学校教育が重要であります。

教育は、新憲法のもとに制定された教育基本法にもとづいて行うべきもので、その根本は自主性と公共性であり

ます。

蜷川さんは「憲法を暮らしの中に生かそう」としてやっておられるが、最も大事なことで、一人一人が憲法をわがものにするということです。

その一つは、国際平和と戦争放棄の堅持、「世界人権宣言」と、人類が進むべき基本的方向を示したといわれるこの憲法を生かしてこそ状況打開への道が存在すると思います。

「京都憲法会議」が結成50周年 30日に「春のつどい」

結成50周年を迎えた京都憲法会議は5月30日(土)午後2時からハートピア京都で「春のつどい」を開く。樋口陽一さんの講演とミニシンポジウムがある。(参加費500円)

京都憲法会議(憲法改悪阻止京都各界連絡会議)は1965年3月24日に教育文化センター大ホールで結成された。当時、改憲問題が大きな政治問題として浮上、同年1月に改憲阻止の一大国民運動の「よびかけ」が末川博、住谷悦治、広津和郎、大西良慶、羽仁悦子氏ら33氏によって行われ、全国に先駆けて京都憲法会議がうぶ声をあげた。百余の団体と、5百余名の支持会員(蜷川知事は会員第一号)が参加した。

結成当初、映画「日本の憲法」(30分)の制作・上映、改憲阻止の歌の創作発表、憲法バッジも延べ25万個普及された。

新憲法普及展覧会に展示されたパネル



資料 京都における憲法運動略年表（1）

（憲法五団体発行の「府民とともにあゆむ憲法30年」より）

1946年

5月1日 第17回メーデー（戦後初）京都御所に3万8千人参加）▽10月26日 府の新憲法普及委員会で普及行事決定（紙芝居・講演会・映画など）▽11月3日 府・市主催、新憲法公布祝賀式典（府一高女）

1947年

4月28～5月3日 新憲法施行記念憲法展覧会（岡崎公会堂）▽5月3日 憲法普及会府支部・府・市共催の記念祝典（円山音楽堂）。市は新憲法普及のため「夫婦は平等なり」の横幕をはった市電50台を1週間運転する▽10月10日～31日 民主主義展覧会（市民文化祭行事・岡崎公会堂）

1948年

5月3日 民主憲法施行1周年記念式典（府議事堂）▽8月15日 平和確立婦人大会（新聞会館に800人）

1949年

3月8日 国際婦人デー（円山に5000人）▽7月30日 平和を守る大会（準備委員＝末川博・恒藤恭・羽仁五郎氏）に1000人が参加、平和を守る会を結成。▽11月28日 京都婦人協議会結成大会、労働会館500人参加。

1950年

1月23日 全京都婦人民主団体代表者会議結成。▽1月25日 全京都民主戦線統一会議（民統会議）公衆会館で発足。▽2月8日 京都市長選で高山義三氏当選。▽4月2日 京都府知事選で蜷川虎三氏当選。▽5月5日 「憲法と地方自治を語る」座談会（知事公舎で知事・市町村長・学者・マスコミ関係者）。▽8月15日 京都平和推進国民大会（平和憲法擁護・全面講和・再軍備反対を決定）

1951年

4月13日 京大同学会「わだつみに応える」文化祭で初原爆展▽5月3日 京都地裁・京都弁護士会・京都市の共催で人権思想普及講演会（円山公園ほか）▽5月4日 府主催平和憲法記念講演会（弥栄中学）▽5月27日 総評京都地方評議会結成（14単産3万5000人）▽7月15日 原爆展を丸物で開催（京大同学会）▽8月15日 地評主催・平和推進国民会議結成大会。▽京

地裁、円山事件（50年12月）で「市公安条例は違憲」判決（53年大阪高裁、60年最高裁で合憲とされる）

1952年

5月2日 府庁中庭で「平和条約発効並びに憲法施行5周年記念式」。▽9月21日 憲法擁護教授懇談会（京都地区各大学）発足。

1953年

3月4日 破壊活動防止法反対・平和憲法擁護全国大会（京都労働会館）5日には末川博氏ら1500人が参加、円山で講演会を開き平和宣言。▽4月17日 民主団体共催「京都統一選挙府民大会」（円山、3800人）▽5月 憲法擁護高校生弁論大会（のち高校生討論集会へ発展）▽11月11日 荒神橋事件おこる。▽12月8日 立命大「わだつみ像」除幕式

1954年

4月16日 京都府知事に蜷川氏再選。▽9月4日 京地裁、映画・演劇労組の提訴に対し、レッドパージによる解雇は違憲と判決。▽11月10日 陸上自衛隊桂分とん地発足。

1955年

6月3日 第一回京都母親大会。▽8月4日 原水爆禁止京都大会（戦後初、円山）500人参加。

1956年

1月12日 地評、憲法擁護大演説会（弥栄中）。▽6月27日 憲法と平和を守る市民集会（大雲院）200人。▽憲法擁護国民連合京都地方本部（護憲連合）結成（議長・田畑忍氏）

1957年

5月3日 京都護憲連合「憲法施行10周年の集い」（京都新聞ホール）。▽6月27日 原水爆禁止京都協議会結成。

1958年

2月14日 京都護憲連合総会を開催、紀元節復活反対など決議。▽4月11日 蜷川知事三選。▽7月10日 憲法擁護教授懇談会、勤評反対の声明文を各府県教委・PTA・教組に送ることを決定。▽11月5日 地評・民間労・中立・社共両党で警職法改悪反対市民大会（円山、6000人）



平和おどり（2010年11月3日、円山音楽堂）

憲法施行の日に誕生した 「平和おどり」を執念で復活

「萬歳」聲かぎり／いまこそ祝え新出発―京都新聞1947年5月3日付は同日円山で開かれる憲法普及会府支部主催・府市共催の新憲法施行記念式典をこんな見出しで報じています。

式典では木村知事が憲法前文を朗読、市長の発声で万歳を三唱。続いて「平和おどり」を祇園、宮川町、上七軒、島原の花街から選ばれた芸妓三十数名が演じました。

この「平和おどり」は、京都新聞社

が新憲法の普及徹底をはかるべく歌詞を公募し、吉井勇らが選考、北区大將軍に住む桂二郎氏（28歳）の詞が選ばれ、西条八十が補作して曲、踊りも作られました。そして施行間近の4月19日、円山音楽堂で発表会が開かれ3万人が集まり踊ったとあります。

歌ったのは歌手の田端義夫、踊ったのは宮川町の芸妓や生徒たち（おそらく中学生）も。

そんなに華やかに披露され、歓迎された「平和おどり」も、それ一回きり

でした。GHQの意向を受けた「憲法普及会」も一年で解散してしまったのです。

まさに、幻の「平和おどり」を、当時、市民の一人として円山公園で踊った記憶を頼りに川井楨子さんが執念でレコードを見つけ、復活させたのは5年前の秋でした。仲間とともに「平和おどり普及会」をつくって憲法集会などで披露、今年も5月3日に円山音楽堂の舞台で踊りました。

同普及会の関河久美子さん（宇治市）は「今、憲法が危機です。そんな時だからこそ戦後平和の原点を、『平和おどり』の事実を知って欲しいと思います」と語っています。

1978年4月16日

府庁の垂れ幕が降ろされた瞬間



「憲法を暮らしの中に生かそう」
—京都府庁正面に掲げられた大懸
垂幕が引きずり降ろされた日のこ
とは、忘れられない。

1978年4月9日の京都府知事選挙で、
嵯峨川民主府政の継承を願う広範な京都府民と
日本共産党が推す前京大教授の杉村敏正氏が
敗れ、自民党・新自由クラブの推す林田悠紀夫・
前自民党参院議員が当選。元副知事で社会党
衆院議員の山田芳治が社公推薦、民社支持で
知事選に出馬、革新分断の挙に出て、自民党
を利する結果をまねいたのである。

それから、1週間後の4月16日、「憲法…」
垂れ幕は、その日朝、「今日中に撤去するよう

投げ捨てられた「憲法」

に」との指示で、降ろされた。予想されては
いたが、突然のことだった。府の施設に掲げ
てあった約100本の垂れ幕のほか、憲法前
文の掲示板も撤去された。

当時、僕は「赤旗」社会部記者で、知事選
取材で京都にいた。7期28年間にわたる嵯峨
川民主府政の引き継ぎならず、という選挙の結
果が出た後、その悔しさをかみしめるととも
に、この垂れ幕が引きずり降ろされる瞬間を
カメラにおさめたいと思っていた。そこで広
報課の人に、引きおろす日時がわかれば知ら

「ポケット憲法」発刊50年 府職労が復活刊行し反響

京都府職労連（森吉治委員長）はこのほ
ど京都府が1965年に嵯峨川知事の下で発
刊、ひろく府民に配られた「ポケット憲法」
を新たに作成、普及しています。

初代のポケット憲法は、前年の64年に内
閣に憲法調査会が設置され、改憲への動き
が強まるもとで、府民ぐるみで憲法の精神
を生かしていくものとして知事の発案で発
刊され、78年までに50万部が配られました。
府職労連が結成されたのは憲法公布の前
日、1946年11月2日。いま安倍政権の
下ですすむ「改憲と戦争への国づくりを許
さない」決意と、公務員として憲法遵守を
宣言する思いも込め、ポケット憲法を発刊
したもので、大きな反響を呼んでいます。

せてほしいと頼んでおいた。

この日朝、共産党京都府委員会の事務
所に来た直後、電話があり、居合わせた
2、3人が府庁まで息せき切って走った。走り
ながら、ただただ間に合ってほしいという一
念。カメラを持って行ったのは、僕とほかに
1人いたはず。駆けつけた時は、すでに途中
まで降ろされかけており、慌てて何回もシャッ
ターを切った。

全国に誇った「革新の灯台」のシンボル「憲
法を暮らしの中に生かそう」の垂れ幕ととも
に、その精神も自民党知事によって投げ捨て
られたのである。

（たかおかそでん
孝岡楚田）

前田英吉と棧敷新松

(その3)

田中隆夫（兵庫県治安維持法同盟要求同盟幹事）

英吉と新松、相次ぎ渡道

前田英吉は1892年に渡道した。群馬での基督教女子教育に失敗した棧敷新松も渡道し、97年には三石町延出小学校校長となっている。

この時、世界史は、帝国主義時代がはじまり、東アジア勢力圏分割が、その帝国主義世界体制成立への重要な契機となる時であった。日本はこの世界的な主役の一人であり、日本歴史にとって大きな転換期となる時であった。

日清戦争勝利後、急速な軍拡、そのための予算規模拡大・増税路線の実現のために、藩閥勢力と政党との妥協が始まり、1900年には、伊藤博文の立憲政友会が生まれる。ロシアと対立し、朝鮮・中国東北部へ進出の為に1902年には日英同盟が結ばれる。しかし、日本の帝国主義化には、社会矛盾の激化のなか、国内での社会統合、国家価値の浸透が必要であった。その国家統合と価値に反する者への弾圧も

強まっていく。

新札幌市史によると、1890年不況以降、社会問題が深刻化し、新興都市札幌でも貧困者が増大した。道の小学校就学率は平均54%、女子は34%であった。1895年、新渡戸稲造開設の札幌遠友夜学校は「貧しい子ども達のための無料の夜学校」であった。教師は農学校の学生達が引き受けた。

丹波・須知村への最初の伝道者（同志社生）の安部磯雄は1887年8月、社会主義者として来札し、禁酒倶楽部で労働問題を演説する。片山潜も2度来札、労働組合の必要性と社会主義について解説する。北海道毎日新聞は、西川光二郎に「社会問題欄」を連載させ、記者碧川企救男も北海タイムス、小樽新聞で社会問題を取り上げた。

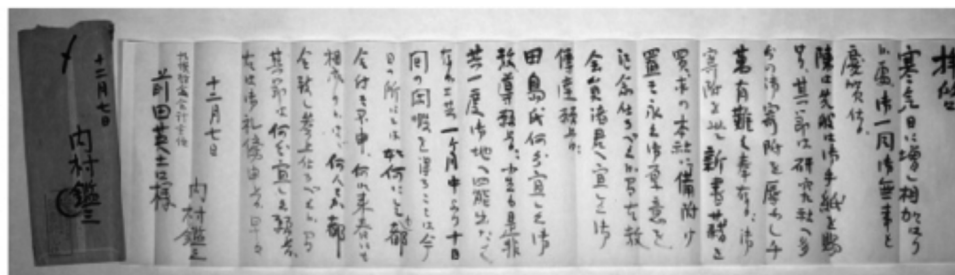
農学校卒業者が「独立教会」

クラークの精神を受け継ぐ農学校出身者が、そのヒューマンで自主独立あふれる活動を展開していく。1882年には、内村鑑三たち1、2期生が、

札幌（独立）教会をつくる。「萬朝報」記者となった内村は、1901年幸徳秋水、堺利彦らと、腐敗墮落した社会救済、団結の輪を広げて社会改良をはかる「理想団」を結成、読者を軸に3166名が加わった。札幌は全国3位で194名。札幌独立教会関係者は

11名加入した。竹内余所次郎と英吉は、1892年に留岡幸助も加わる禁酒会で知り合い、社会問題研究会を組織していた。英吉は、1894年には札幌独立教会に転入し、会計実務などの責任者となっていた。竹内が独立教会に有島武郎とともに所属したのは1901年で、英吉・竹内の心的交わりが続くと共に社会主義への傾倒が強まっていった。

札幌協会会計主任前田英吉宛。寄付を受けたことのお礼と御地に行きたいが閑暇を得ることが難しいと書いている。



戦前の独立基督教会



現在の札幌独立キリスト教会（HPより）

今教会に残る英吉からの手紙は、宮部金吾（注1）宛で、教会牧師に宮川巳作を推薦するための活動報告、東京にいる内村鑑三とのやり取りなどで、英吉が農学校卒業生たちとの日常的に文通していたことがわかる。内村らの研究社への寄付もお礼の手紙の写真が残っている。亡くなる半年前には、丹波・須知教会史に続いて、札幌独立教会創立25年記念誌の編集責任者となり仕上げていく。

札幌初の社会主義演説会

社会問題研究会は、40名ほどで、前回掲載写真の前田商店2階で主に開催した。会員拡大を図るために、理想団札幌支部と共同して、幸徳秋水を招いた演説会を1903年8月9日、禁酒倶楽部で開催した。弁士は、竹内、英吉、幸徳で演題は「社会主義の現況」。札幌最初の社会主義演説会となった。翌々月の10月8日ロシア軍が満州撤退予定日に撤退せず、これを契機に、ロシア撃つべしと「萬朝報」や「毎日新聞」は非戦論の主張を主戦論に転換した。社員の幸徳、堺、内村は非戦論を貫き退社する。幸徳と堺は連名で退社の辞を掲載、社会主義協会（注2）は同情会を開き、その場で「平民新聞」発行を発表、平民社が結成された。同年11月15日平民新聞発行。翌年札幌の円山公園において、花見客のなかで「平民新聞」や社会主義パンフを売り歩き、宣伝拡大行動をする女性たちの体験が、平民新聞に掲載されている。

こうした努力が広がり、8か月後には、平民新聞読者は札幌で50名をこえた。この中に農業を行いながら北海中学校教師を勤める棧敷新松がいて、社会問題研究会にも加入する。

独立教会宮川已作牧師は、信仰に基づく非戦論を教員に語り、「平民新聞」にも発表している。

要約すると「真の愛国」と題して「日本国は最も愛すべき者の一つであるが、その最後ではない。愛し尊むは正義、人道、真理であり、これを蹂躪してまでも、国を愛しなければならぬことではない。もし、これを無視して愛したからといって、自分にも国にも為にならない。正義、人道、真理は戦争にはないもので、いかなる場合でも極力戦争に反対し、これを排斥することに努力しよう。内に鉅毒をだし、外に無意義の国威を伸長しなければ民族の将来を全うすることができないと思う心の滑稽なことよ。元老、閣僚と政治家とに誤らせられようとする日本人よ！ 懲らしむべきはロシアでなく、元老、閣僚、政治家に代表される日本人である。私達の愛する、この国を今の亡国の淵に導き、私達の愛する隣国に百年の禍根を植えつつある彼らこそ、真に懲らしめるべきではないか」という真つ向からの反戦の訴えである。

こうして、会員は反戦の世論を広げる努力を進めた。組合教会のなかで棧敷新松は、非戦を主張するが、孤立していた。

権力による弾圧と謀略も強化

1904年6月6日には、英吉宅で在札幌社会主義者茶話会を開催。社会主義伝道を連絡取り合い、進めることを確認。製缶工を中心にした職工だけの社会主義茶話会も開かれた。

10月になり、英吉らが平民新聞読者懇親会を呼びかけ、15日に禁酒倶楽部



平民社

の会場に14人が参加した。毎月集まることを決めたが、参加者は次第に少なくなった。この14名の内に、私服警官が2名参加していた。

全国的にも権力による監視が強められ、演説中止命令が出されてくる。1905年2月より「平民新聞」は、発売禁止となり、幸徳らが機関雑誌の「直言」を代行にした。

その1905年7月23日号に、札幌平民倶楽部と名づけられた会合の開催が、滝川勇吉名で札幌市民に呼びかける広告が掲載された。同人物は、9月の札幌座での「講和問題道民大会」で「革命を叫べ」と過激演説をする。続く小樽の同大会でも政府攻撃を行ったが、中止されなかった。地元の方雑誌には警官の社会主義者取締を抗議する文章まで発表する。

滝川は元々警察官で、1899年に道内岩内いわねの巡査を退職し札幌にやって

きた。1907年には、北海道庁警部となり、函館警察署勤務となり、その後、杵形村長、宗谷村長などを務めていく人物であった。

前田とともに活動した農学校画学講師は1904年に解雇される。教師は離れ島に赴任。棧敷新松も、学校の教育方針に合わない内容の論文を発表したとして、北海中学を1906年退職させられ、塾講師と開拓農民として生計をえた。棧敷よし子が生れて5年目の時であった。以後豊平川氾濫で作物全滅など、6年間に、双子含め6名の内5人を乳児・新生児として葬ることになる。棧敷よし子は、小学校へ通いながら、朝4時から新聞配達で、月2円を家計に入れた。

札幌大火災と戦争孤児の保護

1907年5月10日札幌大火災が起こった。英吉の家屋、土蔵は全滅した。事前に火災保険に加入していたことが幸いして、土地売買と保険で損害を補てんできた。それでも事後処理で年内いっぱい苦心が続いた。翌年には廃業をする。不動産関係での負債もあり楽ではなかったが、その生活は、「非理財的、利他的生活であった。」（息子則三による自叙伝補足）

先の独立教会記念誌作成もこの期間である。日露戦争による孤児70名を収容する札幌育児園の創設に尽力した。「父は終始基督教の信仰を中核とした多感な理想家肌の人道主義者であっ

た」「英国流の社会主義に共鳴したのも人道主義者としての父と、当時の時代思潮とを照らしあわせて背かれる事のやうに思われる」(同 則三)。

49歳で永眠、丹波で追悼会

英吉は、1909年6月5日午後11

火を継ぐ者たち――

啄木、碧川、則三、清男、よし子

英吉にとって1907年は未曾有の多事多難の年であった。その年末から、急遽取り組んだ札幌演説会が12月29日に開かれ300名の聴衆で成功した。

西川光二郎は、淡路島旧津名町佐野生まれで札幌農学校予科を出た後、東京専門学校(早稲田大学前身)を碧川企救男らと卒業、農学校時代に深井英五の著書「現時の社会主義」に感動し、その後、社会主義者の道を歩むことになった。その彼が、11年ぶりに札幌に、

人気の演歌師添田啞蟬坊と共に帰ってきた。前田も参加者を組織し、他に碧川企救男と竹内余所次郎が弁士となり社会主義宣伝を行った。年明けて1月3日には小樽に遊説をした。150名が参加、小樽日報を退社したばかりの石川啄木が参加をした。啄木は、その日の日記に「(友人に) 自分は、社会主義は自分の思想の一部分だと話した。」「社会主義は、予の所謂長き解放運動の中のひとこまである。最後の

時半に脳出血で意識を失い永眠した。49歳であった。札幌独立教会で葬儀が行われ、7月11日には、丹波・須知公会堂にて故前田英吉追悼会が開かれている。須知を去って18年目であった。

解放に到達する迄の準備運動である。そして最も眼前の急に迫れる緊急問題である。――今は社会主義を研究すべき時代はすでに過ぎて、その実現すべき手段方法を研究すべき時になっている。」と書いて、啄木にとって演説会が、社会主義を身に着ける力になったことを示している。

碧川企救男は、小樽新聞論説記者であったが、監獄部屋、アイヌへの差別などを取り上げ、この後も小樽商業で始まった軍事教練反対運動などを取り上げていく。龍野市の三木露風の実母であったかたと小樽で再婚し、かたは、女性運動家として生涯を生きることになる。

新札幌市史の社会主義運動の項を書いたのは堅田精司であるが、別の所で「余所次郎や英吉ら、明治のキリスト教社会主義者の運動は、社会福祉の面で開花したが、社会主義思想の面では開花しなかったといわれる。そうだと

うか。」と自問して、「竹内は山田美都を育てたし(離れ島に赴任させられた教師、新婦人協会の結成に参加し教育部長となる。)、前田の息子の則三は、：中略：北海中学卒業後、家庭学校の教師となって活躍したし、棧敷新松の娘であるジョセフイン(よし子と改名)は労働運動に身を投じ、今も活動している。竹内や前田たちの社会主義思想は、ほかの土地で開花し、実を結んだのである。」と書いている(80年代の記述)。

逢坂信忌は、竹内や有島武郎とともに1901年、札幌独立教会に入会、編成替えて東北帝国大学農科大学(現北海道大学)で、社会主義研究会を組織する。有島武郎に指導を仰ぎ、かなりの学生、生徒を組織できた。卒業後、救世軍へ就職、越後長岡の組合基督教会をへて、宮部金吾に請われ、札幌独立教会牧師となる。1946年の戦後までの苦難の時期を勤めあげた。前田則三が札幌中学に入学後、逢坂の研究会に参加、2年クラス会で日頃の社会主義研究を発表した。校長は、これを不穩言動だとして退学処分とした。そのため、北海中学に編入学した。

英吉昇天33周年の年、戦時下の1941年、前田則三は墓参で帰郷したさい、独立教会で牧師となった逢坂と再会した。逢坂は、則三が父の思いを継いでいるのを知り、喜んだ。

前田則三は、留岡幸助の開いた北海道遠軽の家庭学校へ1915年に就

職。留岡は、結婚相手を世話するなど、親代わりの援助を注いだ。2012年の家庭学校文集で校長は、前田則三が植樹した千本の木が、今もそびえ立っていることを語った後、「前田先生はその後、作業療法の先駆者として東京松沢病院で活躍され、医師・看護長とともに患者さんと作業し、歌声を響かせていました。」と書いている。障害者・患者9条の会の呼びかけ人ともなった精神衛生学の権威、松沢病院で同時期に働いた秋元波留夫(1906年(2007年)は、前田則三について、作業療法を最初に実践した呉秀三を頼って松沢病院へ来、作業療法を施展せるうえで大きな貢献をしたと述べている。

英吉の友、留岡幸助は、1894年から3年間アメリカに留学。感化監獄で実習などを行い帰国、1899年巢鴨に家庭学校を開き、遠軽にも分校を作る。英吉、則三との変わらぬ関係は続いた。留岡幸助の四男、留岡清男は、1925年法政大学心理学講師などを務めていたが父幸助の病により1929年から、遠軽の家庭学校の教頭となり教育改革、経営にあたる。大学で同僚であった城戸幡太郎とともに1933年創刊の雑誌『教育』と岩波書店発行の『教育学辞典』の編集にあたり、これらを母体にした「教育学研究会」を結成した。1940年大政翼賛会役員など就任し翼賛運動に沿

て戦争協力となり、1941年には、教育科学研究会解散、雑誌『教育』も1944年廃刊となる。この年、教育科学研究会メンバーが治安維持法容疑で検挙され、城戸、留岡清男も秋に拘留される。直接には教科研での清男の言動であったという。

三男の兄幸男は内務省官僚として各県警部長を歴任し、1942年まで警視庁警視総監であった。

戦後、清男は生きざまを反省し、新たな決意で教育にあたることになる。

棧敷よし子 不屈の生涯

川端署での拷問に屈せず、戦後は民主医療活動に

棧敷よし子は、1924年日本女子大社会事業科に入学、社会科学研究会で科学的社会主義を学び、卒業後深井英五（当時日銀副総裁）の紹介で、岡山倉敷紡績万寿工場の教化係として就職、全協繊維の活動家と連絡を取りながら1000名を超える女子労働者の深夜業撤廃後の労働強化の実態をつかみ、女子労働者を組織していった。

1930年11月に8時間労働、生理休暇、賃金アップ、給食改善を掲げストライキでたたかった。検束されたが、労働科学研究所所長暉峻義等の口添え



棧敷よし子 1989年頃、奈良にて。南章さん撮影。提供（所蔵）岸伸子

もあり不起訴で釈放。大原社研所長森戸辰男から、大阪府内務部社会課社会事業主事川上貫一を紹介され、大阪十三の産婦人科医院の事務、夜は日本毛織女子工員に和裁を教えるなど生活を続けた。この頃1931年5月父新松は69歳で亡くなった。

川上貫一からは哲学などの講義を受け、1932年1月に日本共産党に入党、非公然活動を開始する。兵庫で繊維労働者の組織などを担当していたが、同年4月淡路からの連絡中に須磨浦公園で再度検挙。兵庫署で完全黙秘、ハンストなどで闘う。

北海道に護送される途中、大阪駅前で脱走した。大阪上本町で党と連絡をとり、再度非公然の活動として、京都府委員会での任務を、三高生であった桑原英武から引き継ぎ、京都で活動するようになる。その一端は、久野収の「市民として哲学者として」にも登場している。哲学者真下信一など文化人、

知識人からのカンパ活動も重要であった。島津製作所、中央郵便局、西陣、友禅など染物関係などの中に入って調査・活動を進めた。1933年3月三度目の検挙となるが、京都・川端署では、あらゆる暴力と女性を凌辱する拷問を受けたが、「死んでも言ってやるものか」と頑張りぬいた。中京刑務所、膳所刑務所、北海道の刑務所と4つの冬を過ごし懲役2年6か月の判決で札幌刑務所に服役した。

出所後、再び大阪へ戻り、深井英五より更生資金として200円を送られ、女子医専に入るなら、学費を援助すると申し出があった。しかし、東京品川の御殿場病院で見習い看護婦をして過ごし、1938年36歳の時、東京警視庁衛生部で看護婦試験に合格、結核予防会の仕事に就いた。1941年より愛媛県農村結核予防模範地区指導所に勤務、保健婦、助産婦免状をとり、農村での結核予防活動にあたった。

1944年暉峻義等の依頼により、満州開拓団での結核予防活動につくことになる。敗戦後、残留開拓民の保健活動にあたり、1949年中華人民共和国建国後、10年間民間での医療活動にあたった。帰国後、日本共産党に再入党し大阪の川上貫一を訪ね、淡路医療生活協同組合淡路診療所をスタートに民主医療活動に従事した。1992年1月亡くなった。戦前神戸で働いていた妹のルツが元気に、北海道元江別に住んでいる。

（注1）宮部金吾―1860―1951. 植物学者。札幌農学校第2期生、卒業後、東京大学理学部において植物学を学び、またハーバード大学で海藻学、菌学を学んだ。北海道、千島列島、サハリンの植物相の調査を行い、『樺太植物志』を著した。また北海道の海藻の研究に先鞭をつけた。その後植物病理学に転じ、1918年北海道大学に植物病理学講座が開設されるのに伴い同教授。46年、文化勲章を受章。（以下参照）

（注2）社会主義協会―1898年に（社会主義の原理と之を日本に應用するの可否を考究する）目的で設立された社会主義研究会を、1900年1月に社会主義を（日本に應用すること）を目的に改組した日本最初の社会主義者の組織。安部磯雄を会長に、片山潜、幸徳秋水らを擁して社会主義の研究と啓蒙にあたり、平民社と一体となって草創期の日本社会主義に大きな足跡を残したが、日露戦争中の04年11月に警察から解散を命じられた。

●参考 新札幌市史 堅田精司記述分／永遠なる青春 棧敷よし子／葦の葉 第12集 芦田丈司／日本の科学者 2015年3月／日本民衆の誇り19条を人類史の本流に―「宮澤・レーン冤罪事件」の再来を許さない 山本玉樹 さつぽろ文庫／札幌とキリスト教／日本社会運動人名辞典

●札幌独立キリスト教会 井上ノリさん、札幌大学 桑原真人先生、北海学園 北明邦雄先生、治安維持法犠牲者国賠同盟北海道 宮田汎会長、北海道立図書館の皆様には、資料調査のお世話になりました。感謝申し上げます。札幌女性史研究会 岸伸子さん、平和と男女平等 高槻島本100人委員会―棧敷よし子さんを追いかけてプロジェクト 代表正路怜子さんには、北海道への探索の旅も含めて棧敷よし子さんに関わり、あらゆることをお教え頂きました。感謝申し上げます。

●棧敷よし子を幾度も援助する深井英五（同志社卒業）について、記述予定でしたが、改めて別途書いていきます。



鈴木良さん^{りょう}を偲ぶ

「部落」の窓からものを見てはいけない

奥山峰夫

(元大阪経済法科大学教授／部落問題研究所理事)



鈴木良先生が2月16日、東大阪市の病院で亡くなられた。80歳だった。

◇

2月1日、部落問題研究所で午前中研究に関する会議、午後から研究会があり、それに良さん（ご本人には「先生」と言っていたが、それ以外では良さんと言っていたのでそのように表記する）は出席し、いつものように発言していた。この日顔を合わせたら『人權と部落問題』1月号に書いた丹波正史さんの著書『部落問題解決への理論的軌跡』の紹介が「よく（うまく）書けている」「どんどん書きなさいよ」と評価してくれた（ちなみに、この本の第9章で、馬原鉄男・杉之原寿一・真田是氏とならんで良さんの理論的貢献について述べている）。良さんが褒めてくれたのは、この時が2度目になる（最初は、電話で褒めて頂いたが、村下博氏〈大阪経済法科大学副学長〉の追悼文「村下博くんとの出会いと別れ」だった）。

以下、幾つか思い出すことを書いて

良さんを偲びたい。

◇

良さんは1934年、川崎市生まれ。京都大学文学部、同大学院博士課程を経て1963年、奈良女子大学附属中の教師となった。1985年に立命館大学に移り2000年に退職。この年、部落問題研究所の理事となった。

良さんと出会って40数年になる。最初は、多分部落問題研究所で働くようになる前、1968年に開かれた「若者のための部落問題講座」であったと思う。左京区の熊野神社の会館で開かれた。参加者10名以下の小さな会であったと記憶する。講師は、良さんのほか馬原鉄男・塚本景之・中西義雄・大同啓五・布村忠雄氏らであった。良さんは部落の歴史の話をした。これは後に、小さな冊子になった。B6判30頁で「解放パンフ（1）」となっている。（2）以降は出なかったと思う。発行所は、当時下京区にあった汐文社、1969年11月発行となっている。

これを今年、2015年の良さんが

見たとしたら何と言うだろうか。研究というものは、そういうものだと言うかもしれない。

1960年代に締結された日米安保条約の固定期限終了を目前にして、良さんは「いま日本は大きな分かれ道にたっています。安保条約を自動延長し、本土に核兵器を持ち込み、本土を沖縄のようにしようとするアメリカ・自民党政府の動きと、これに反対して安保廃棄・沖縄無条件全面返還を目指す民主勢力の対決です。…このまじいパンフレットが、差別とたたかう部落の青年諸君に何かの役に立つことを心から願っています」と結んでいる。熱い気持ちが伝わってくるようだ。

この講座の前身は記憶していないが、一つだけ覚えているのは「部落解放同盟」（60年綱領）についてである。綱領前文は「アメリカ帝国主義に従属する日本の独占資本は、日本の民主化を食い止める反動的意図のもとに部落に対する差別を利用してゐる。それ故に現在では独占資本とその政治的代弁

者こそ部落を差別し圧迫する元凶である」と規定していた。この時の講師は、この独占資本、部落差別元凶論について説明したと思う。私は、巷に発生する「差別事件と独占資本との間にどういう関連があるのか判然としない」と前から思っていたので、その点を質問した。すると講師のTさんは、それは「様々な複雑な仕組みによって貫徹している」と答えたと思う。

◇

私は、1969年3月から部落問題研究所で働くようになった。東上（高志）さん（理事・事務局長）から、文化厚生会館事件で（1966年、解同朝田（善之助）府連による不法占拠事件）以降、定期発行ができていない研究紀要『部落問題研究』をやらないかと言われたからである。今もそうだが、原稿が予定通り入らないことがしばしばである。70年代初めから「部落問題研究の成果と課題」という毎年の特集をしていて、良さんに近代史研究の分野を依頼した。現職の教師であり、野球部の面倒を見ていた良さんは多忙であり、締め切りを過ぎても原稿が入らなかった。梅雨の終わりに大雨の中、近鉄で奈良駅まで行き、バスに乗って奈良女子大学附属中高校へ行ったことがある。良さんは授業の間に出てきて原稿を渡してくれた（『部落問題研究』34号、72年7月）。

良さんは、『月刊の子も伸びる』に連載したものをまとめて、『教科書

のなかの部落問題』を1989年に研究所から刊行した。このとき、良さんに「売れると思うか」と問われ、(本当にそう思ったから)「売れるといいですね」と答えた。この本は、その後増刷を重ね、ついには増刷改訂版まで出た。それからかなり長い間、飲んだりした時には「奥山はこんなもの売れないと言った」とイジメられた。

◇

良さんは2000年、立命館を退職した。退職前、東上さんの提案で、尾川昌法常務理事と理事就任の要請に行った。2度立命館の近くの喫茶店で話し合ったと思う。

その後、2005年に『水平社創立の研究』を出版した。この中に「全国水平社創立大会について」という章があり、この中で『水平』1巻1号の広告欄の分析を通して、京都伏見の博打打ちの親分が高額の金を拠出していることを明らかにしている。従来から抑圧されてきた全国の部落住民が起ち上がり水平社を結成したという、一面的な(浪花節的)理解があったが、この指摘には思わず唸らされた。

2012年、京都市で開かれた第8回地域人権問題全国研究集会の1日目全体会で記念講演「歴史研究と部落問題の解決」をおこなった。一人で話しかけるのはしんどいということとで私が聞き手になった。大学(八尾駅前学舎)の帰り、質問事項をメモにして、近鉄河内永和駅(東大阪市)近くの別宅(書

齋)を訪ねた。良さんはメモには殆ど目もくれず、あれこれと国際情勢などの話をした。結果3、4回通うことになった。全体会の直後出会った近代史のH先生から「味が出ていて良かった」と言われたが、おそらく打ち合わせで、良さんは「部落の窓」からものを見てはいけないということを言いたかったのだろう。

良さんは研究所に見える度に、奥山君、奥山さんと応接の椅子に呼び、あれこれどう思うか聞き、またこういうふう考えたかどうかと言った。いずれにしても物事は皮相的に見るのではなく、原理的、根本的に考えなければならぬという教育的指導であったと思う。良さん、長い間親しくして下さい、有難うございました。

鈴木良さんは歴史学者。専門は日本近代史・部落問題など。立命館大学教授・部落問題研究所理事・国民融合をめざす部落問題全国会議代表などを務めた。主な著書に『近代日本部落問題研究序説』『水平社創立の研究』などがある。

立命館大学産業社会学部の鈴木良ゼミナールは毎年のように『原爆投下と京都の文化財』(1988年・文理閣)など研究成果を出版していた。また、地元・東大阪市でも住民運動の先頭に立って活動した。

BOOK

宮城泰年著

『動じない心』

「曇り」を磨き、「心」を鍛える、「山伏」力

宮城さんは昨年の「京都の民主運動史を語る会」総会に出席されていた。余りに若々しいので人違いかと思つたがやはり聖護院の門跡門主その人であった。今年の総会では「記念講演」をしていただくことになった。

2年前に上梓されたこの本には、山伏の修行とは「行を通して心を鍛えること、身体を通して心に入る行為」と書かれている。25歳のとき山伏になって五十有余年、いまなお百キロを歩く「大峰奥駈修行」など過酷な修験を積み重ねてきたからこそその若々しさで

山伏の世界を分かり易く

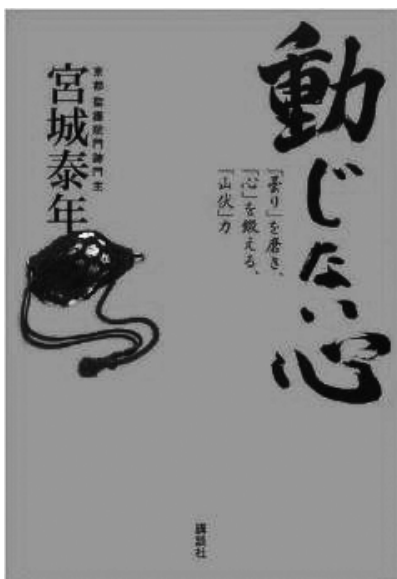
ある。

本山修験宗・山伏の総本山、皇室とも縁の深い寺院の門主だが、元新聞記者だけあって、分かりやすく読みやすい文章である。「動じない心」とは「動かされない心」であり、同時に「自在に動ける心」「受け容れる心」になるなど、生と死という極限の中で得たという修験道の教えを説いている。それは人としてのこたわりの小ささ、人間の弱き真理への克服であろう。

「法螺」の役割や「女人禁制」「超能力者か仙人か」など余り知られてない山伏の世界を垣間みることでできる。

明治政府の修験道廃止によって歴史が途絶えた全国各地の旧修験を訪ね歩き掘り起こす試みもぜひ実現してほしい。(Y)

(講談社、192頁上製、本体1500円)



随想

安倍晋三首相が、侵略戦争や植民地支配の非を、否定するような言動を続けるので、植民地生まれの私などは、何だか肩身の狭いような思いがしている。

明治十八年佐賀市六座町に生まれた母方の祖父、森永吉次は、佐世保の海軍工廠から、旅順への出向を命じられた。日露戦争が終結して、閉塞隊が船舶を沈めて閉ざそうと試みていた、旅順港の入り口から沈船を取り除くためである。

任務を果たした後、祖父は佐賀からお嫁さんを迎え二歳年下のマツと結婚した。そして満鉄（南満洲鉄道株式会社）に就職し、大連に住むこととなったのである。その聖徳街五丁目に建てた立派な家、地下室や、大きな温室などもあった家には、何度も遊びに出かけたのでよく覚えている。

母サイは八人きょうだいの二番目で明治四十三年に生まれている。そして、明治四十年生まれの父輝政は、岡山師範を卒業後、広瀬の小学校の

訓導をしていたが、旅順に高等師範が出来たのを機に渡満、母と結婚した。

昭和九年、私が生まれたのは大黒町であったが、その後緑山の裾野、紅葉町の官舎に移り住んだ。上に浄水場、すぐ下には専門学校などもある、閑静な住宅街であり裾の方には市電の走る幹線道路などもあった。

現在緑山は頂上に大きなテレビ塔の立つ大きな公園になっていて、私

（零下十度以下にもなった）には中庭に作られたスケートリンクでスケートするか、そうでないものは、教室でおしくらまんじゅうをしていたのを思い出す。私は競争用のスケート（ロング）を買って貰って一度、路面が全部凍りついた朝、家から学校までスケートをはいたまま登校したことがあった。

空襲警報が鳴ると、グラウンドの下に掘られた防空壕に入ったが、警

空壕に向かつておられた先生方と出会い「何しに来た。早く帰れ」と叱責された。

帰途、背後に気配を感じ振り向くと超低空の米軍機があった。若い兵士が、にやりと笑った顔を今でも忘れることが出来ない。アカシヤの並木道、教えられていた通り目と耳を両手で抑えて腹這いになった脇を機銃掃射の弾丸の音がパシパシパシと通り過ぎたのを時折り思い出す。

生活困窮者から帰国させるという方針のもと、Cの四三団の私達が引揚げたのは昭和二十二年の三月であった。父の郷里岡山へ着いたのは三月二十二日であったが、それから半年後の十一月の二日に父は亡くなった。肺結核であった。享年四十二歳、早い死である。

生地大連のこと

黒住嘉輝（本会世話人）



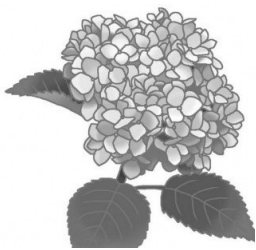
たちが訪れた二〇〇八年には人があふれていた。

私を通ったのは、伏見宮のお手植えの松があるという伏見国民学校であり、隣には大連一中があった。どちらも煉瓦造りの立派な校舎であった。スチームなども完備していたのだが戦時中の燃料不足で、校務員さんが出勤してから焚き始めるため、一、二時間目は暖房が利かず、寒い日

戒警報だと授業は中止で即刻下校せよとなった。四年生くらいから軍事教練の真似ごとが始まり匍匐前進や小型の手榴弾投げの練習があった。

当時校舎の屋上で伝書鳩を飼育しており当番を決めて世話をしていた。「すぐ下校」と言われて家に帰った私は鳩に餌や水をやる当番だったことを思い出し、大急ぎで学校へ引き返した。御真影や詔勅を捧げ持って防

（くろずみ・よしてる氏は「塔」短歌会選者・元府立高教組委員長）



会員消息

父の治安維持法被害と私

藤本杏子（左京区）

先日のお例会有難うございました。（父・草野昌彦を語る）貴重な例会を開いて頂き感謝しております。長い年月、治安維持法被害で悩みながら、自覚が足りず、歴史をきちんと検証し発言していかねければ、とは考えず、ひたすら胸の内に抱えて表に出さないように、隠すことに神経を使ってきた間違いを恥ずかしく思います。遅いとはいえ、いろいろのことが

はつきりして良かったと思っています。今後もしよろしく願います。心あたらない会報です

成澤栄壽（中京区）

『燎原』をご恵贈下さり有難うございました。心温かい会報ですね。全体的に内容が優れ、編集も行き届いていると思います。ただ、本の紹介を書いたのは頂きましたが、少々丁寧さに欠け、『綿』に関する大事にすべき点をふれて頂くべきだったように思います。

先達の生涯を仰ぎみる

秋山花子（箕面市）

「燎原」217号ありがとうございます

ました。先達の生涯を仰ぎみる思いで読了致しました。いつか「語る会」例会に参加させていただきまして、時代を考えることに、新しい視点を学ばせて下さいませ。

◇

「歴史問題」が注目されている今、「燎原」の役割は非常に大切です。ご奮闘下さい。（舞鶴市・佐渡一郎）

◇

いろいろな京都の歴史（政治・社会の背景）が分かり勉強させて頂いています。（北区・釋 恵子）

死去

柿木茂（城陽市）

指導者たち、京大学生運動の同志たちなどおよそ500人。宮本憲一氏、高谷清医師の講演もあった。「京都新聞」は「凡語」欄でこの祝う会を紹介、「過重労働をもたらす恐れもある規制緩和が進む中、老医師の実践から学ぶべきことは多い」と書いた。

倉岡愛穂墓前祭に40人

新興教育運動で逮捕され、1937年4月9日に特高に虐殺された小学校教師・倉岡愛穂を偲ぶ第7回墓前祭が4月18日、郷里の京丹後市丹後町宇川で開かれ40人が参加した。倉岡は郷里の小学校に勤めたあと神戸に転勤し活動していました。

細川汀先生 米寿祝賀会



情報スクラップ



細川汀さんの米寿を祝う会

3月29日、京都ロイヤルホテルで細川汀さん（本会会員）の米寿祝賀会が開かれた。細川さんは岡山県高梁の生まれ、京大医学部を出て、京都府向陽保健所長などを務め、高度成長期には、労働災害、職業病、労働安全衛生の専門研究者として世に知られた人。とくに「KAROSHI」の表記で辞書に載り海外でも定着した「過労死」の名付け親の一人としても有名。会場には府立大のゼミ生、全国各地でお世話になった労働組合のかつての

『燎原』の合本「電子ブック版」発売中！

CD-ROM版 各巻頒価3000円（送料共）

- 第1巻（創刊号から第50号）
- 第2巻（第51号～第100号）
- 第3巻（第101号～第150号）
- 第4巻（第151号～第200号）

*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申し込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823（井手方）



京都の民主運動史を語る会・結成35周年記念

2015年度 総会と懇親会のお知らせ

とき 7月4日(土)

午後2時～総会

5時より懇親会

ところ 京都市職員会館

かもがわ

中京区土手町通夷川上ル末丸町
☎075-256-1307



記念講演 京都の宗教者の今昔

講師 宮城泰年・聖護院門跡門主



1931年京都市生まれ。龍谷大学卒、新聞記者を経て、25歳で聖護院に。執事長、宗務総長など歴任、2007年に第52世門主に就任。熱心な反戦平和活動でも知られ、日本宗教者平和協議会代表委員、龍谷大客員教授。京都仏教会常務理事。著書に『動じない心』（講談社）など。

会員外のみなさんもふくめ多数のご来会をお待ちしています。（会員外の方は資料代300円が必要です）

講演会・総会のあと同じ会場で懇親会（会費3000円）をおこないます。同封のハガキでお申し込みください。

◆催し案内

京都ジャーナリスト9条の会講演会「大阪都構想住民投票に示された民意」橋下維新の行方はどうなる」広原盛明・元府立大学学長 5月23日（土）午後2時～5時30分、東山いきいき市民活動センター集会所。資料代1000円。参加自由。問い合わせ ☎075-213-2451（隅井）

白井聰講演会「安倍晋三とは何者なのか」6月14日（日）午後1時30分～4時30分、京都アスニー3階。参加費1000円。主催・申し込みはブックセンターかもがわ（☎075-415-7902）

山本宗補写真展「戦後はまだ……」刻まれた加害と被害の記録」7月4日（土）まで立命館大学国際平和ミュージアム中野記念ホール。関連講演会 5月30日（土）午後1時30分、林博史（関東学院大学教授）。

防衛のプロが市民と語る「新安保法 京都労演下半期の例会」▽7月24日夜・25日昼 Ⅱこまつ座・井上ひさし作「父と暮せば」東部文化会館▽9月6日昼・7日夜 Ⅱ劇団俳優座・斎藤憐作「春、忍び難きを」呉竹文化センター▽10月12日昼・13日昼夜 Ⅱ東京芸術座・小林多喜二原作「蟹工船」府立文化芸術会館。☎075-231-3730 労演。

編集後記



▼「療原」の創刊は1980年3月15日。前号で35周年を迎えたのだが代表

らに次代に継承されていつているからであろう。今回の府・市議選の結果からもそれは読み取れる。「療原」の火を消すことなくさらに広げていきたいものだ。

だった住谷悦治さん以下発足時の世話人9人はすべて亡くなられた。しかし「療原」に載った語る会の記録や多くの証言、研究、資料などは貴重である。京都の共産党や民主勢力が強いのは戦前からの運動が戦後に受け継がれ、さ

▼会員を増やすためみなさんのご協力をお願いします。見本誌をお送りしますので、ぜひご紹介ください。また「随想」「忘れ得ぬ人」「この1枚」「その時、私は……」の欄などにどしどし原稿をお寄せください。（湯浅）